

試聴会・訪問記掲載

河口無線ハイファイディリティ試聴会報告(2016.12.17)

河口無線で開催されたラックスマン「LX-380」と「ES-1200」の試聴会に行ってきました。

日時：12月17日 PM1:15～PM3:00

会場：3F ハイファイディリティ試聴室

<使用機材>



ラックスマン 管球プリメインアンプ LX-380 ¥496,800



ラックスマン CDプレーヤー D-380 ¥313,200



クリーン電源システム ES-1200

ラックスマン クリーン電源 ES-1200 ¥626,400



ラックスマン ベルトドライブプレーヤー PD-171A ¥534,600



タンノイ スピーカーシステム ターンベリー/GR ¥972,000 (ペア)



当日のセッティング



上段：LX-380
中段：D-380
下段：ES-1200

<試聴経過>

始めにラインアップの説明があり、上記の他カートリッジは Ortofon の MCQ30S が使われました。また、クリーン電源 ES-1200 の比較対象としてはオーディオテクニカのタップが使用されています。

最初のデモは ES-1200 の効果ということでオーディオテクニカのタップを使用し、ボーカルと神尾真由子の V ソロの CD 再生があり、電源を ES-1200 から取るとどう変わるかというデモでした。オーディオテクニカのタップの音は広がり感があってパワフルな音がしていますが、神尾真由子の V ソロがきつく鳴るところがあり、先月生演奏を聴いてきた印象とはかなりかけ離れています。電源を ES-1200 から取ると、全体に音が引き締まってクリーンな感じにはなりますが、やはり神尾真由子の生演奏の印象には届きません。

この ES-1200 については解説の冊子が配布され、クリーン化する回路などの概要の説明がありましたが、オーディオ誌やネット上での評判もよく、詳しく [解説](#) がなされています。面白いのは、元電源とクリーン化後の歪率が表示されることで、この試聴

室では元電源の歪率は1.9%、クリーン化後の歪率は0.1%となっているとのことですが、一般家庭では元電源の歪率は数%、ひどいところは10%近くになることもあるとのこと、そういった条件下ではもっと大きな効果が認められるかもしれません。以降はクリーン電源使用の下、試聴が進行しました。

次にかかったのは仲道郁代がプレイエルを使用し、バックもピリオド楽器のオケのショパンのP協1番とロックみたいな曲でしたが、ロックのパワフル感はいいとしても、仲道郁代のプレイエルも生演奏を聴いていますので、これも実際の印象とは違います。

LX-380についても説明がありましたが、[メーカーサイト](#)や[ネット上の解説](#)もあります。出力段には6L6GCが使用され、接点劣化を防止するため、ボリュームや切替SWは音楽信号は通過していないコントロール情報をおくるだけのものが使用されているとのことでした。

引き続き、ネルソンス/ボストンのショスタコービッチの9番がかかりましたが、立体的な音場感や楽器の質感の良さは感じられるものの、最新録音の良さが出しきれていない印象でした。往年の38FDとIII LZの黄金の組みあわせを意識して、スピーカーにターンベリー/GRを使用したこと、さらにアナログ出力段に真空管を使用したD-380を使用したことで最近のデジタル音源の良さを活かし切れなかったことが上記の印象に繋がっており、例えば、B&Wの802D3あたりだと印象が変わったかもしれません。

この後、人気商品で売れ行きも上々のPD171AによるアナログをLX-380のMCポジションに入力したJazzのアナログ盤とちあきなおみのテスト盤がかかりましたが、やはりアナログがかかるとほっとするところはありますが、ターンベリー/GRの音の濃さがきになるところでした。

CDに戻って教会音楽がかかり、[D-380](#)の説明がありました。8倍オーバーサンプリングの後、 $\delta\sigma$ 回路を得てアナログ変換し、切り替えできる半導体出力段と真空管出力段を通るとのことでした。真空管出力段は小出力アナログアンプ仕様で出力トランスも持っているとのこと。しかし、D-380→LX-380→ターンベリー/GRではそれぞれの個性が主張してうまくマッチングしておらず、教会音楽の合唱も濁りがちでした。そして最後に石川さゆりのアナログで締めくくられました。

総合的な印象としては、試聴システムの組みあわせの問題と選択された音源の問題とが重なって少し期待外れということになりました。別の機会に組み合わせを変えてじっくり聴いてみたいと思います。

